

きのこ・かび 関連図書の紹介

吹春 俊光

「森とカビ・キノコ-樹木の枯死と土壌の変化」

著者：小川真，出版社：築地書館，2009年8月10日発行，四六判，256頁，ISBN：978-4-8067-1387-6，2520円（税込）

「二十世紀初頭以来、なぜか樹木が大規模に枯れるという奇妙な現象が増えている」という書き出しが導入部となり、マツ・スギ・クリ・ナラという樹木に各章で焦点をあて、それぞれの樹木が枯れている原因を考察した本である。「近年地球規模で拡大する樹木の枯死現象の誘引がどこにあるのか、考えるつもりで書いたもの」ということで、述べられている内容は非常に深刻な現実である。著者の森林総合研究所時代の仕事のパートナーであった山家義人さんによる「スギとケヤキが衰退する過程」の図（49頁）や、「首都圏におけるスギの衰退状況を等高線状に表した地図」（51頁）など、これまであまり人の目にふれなかったような資料も引用されている。衰弱死型と頓死型があるという「ナラ類が枯死する過程」の図（117頁）も掲載されている。現在、小川先生は、樹木相談師として全国を水戸黄門のように行脚しておられるが、その過程で得られた情報も広くもりこまれている。50年以上も菌根と菌根菌を観察し続けた著者の問題提起は深刻で、地球規模の環境汚染が、樹木の根をささえる菌根を衰退させ樹木を枯死させているのではないかと、というのが著者の直感のようである。地球に暮らす全てのひとが読まねばならない、と思わせるような重大な内容を持った本なので、談話会会員は是非手にとってください。

「冬虫夏草ハンドブック」

著者：盛口満／写真：安田守，出版社：文一総合出版，2009年6月20日発行，新書判，80頁，ISBN：978-4-8299-0143-4，1470円（税込）

冬虫夏草の図鑑というと、これまで小林義雄・清水大典先生の詳細な図による分厚い網羅的なものを思いうかべるのだが、これは違う。取り扱う種類を68種にしぼり、発見の方



法、完全世代と不完全世代の子実体の差異などの簡易な入門のイントロダクションを冒頭に、美麗生態写真とともに、非常にわかりやすい解説を付し、野外にも持って行ける愛すべき袖珍本となっている。写真は「森の休日5 集めて楽しむ昆虫コレクション／山と溪谷社」で、驚くような昆虫写真をみせてくれた担当氏によるもので、探すポイントも教えてくれるような生態写真が採用されており、冬虫夏草を見つけに行ってみよう、という意欲が湧く、よくできた図鑑です。

「冬虫夏草の謎」

著者：盛口満，出版社：どうぶつ社，2006年6月20日発行，四六判229頁，ISBN：978-4-88622-333-3，1680円（税込）

著者の名で amazon.com を検索したところ38冊の本がヒットした。動物の骨、昆虫、貝などありとあらゆる自然物に興味をもつ著者、そして前述の「冬虫夏草ハンドブック」を著した著者が、どのように冬虫夏草の世界に近づいていったのか、を紹介するのが本書である。冬虫夏草を採集しながら勉強する過程で得た知識を、じわじわと紹介してくれる。そのため懇切丁寧な冬虫夏草の入門書にもなっている。冬虫夏草研究会での採集会の場面描写もあり、珍菌である虫草を会員さんがどんなふうに採集をしているのかもよくわかる。あの清水大典先生の「お座敷」とは何か？ ゴキブリから生える冬虫夏草って何だ？ 南米のアマゾンや奄美大島そして千葉の里山でもみつかったイトヒキミジンアリタケとは何者か？ いろんな冬虫夏草をめぐる話が紹介されています。

「京もきのこ！一期一会」

著者：高山栄，出版社：京都新聞出版センター，2009年7月7日発行，A5判，159頁，ISBN：978-4-7638-0625-3，1575円（税込）

絵がほんとうに美しい。すこし硬質の画風が独特である。例えば本郷先生が記載されたニセクロハツ（144頁）。ほんものを見るよりもリアルなのではないかと思わせる。しかし高山さんが得意とするのは、ほんとは目に見えない地下の世界、あるいは掘ってもなかなか見えない生きもののどうしの繋がりを描く図ではなかろうか。例えば、森の中のツチアケビとオニノヤガラ、そしてナラタケを描いた図（87頁）。これは無葉緑のランが、森の中、地中の世界で暮らす姿をリアルに描いたものである。ナラタケというきのこをうまく騙して太るランの姿が森の中で妖しくたくましい。あるいはナガエノ

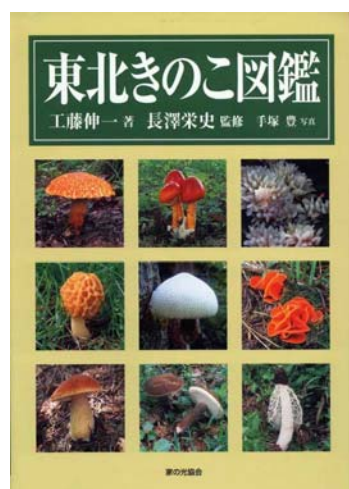


スギタケとモグラの関係を描いた図(57頁)。モグラの目線でナガエノスギタケを眺めるような気持ちになってくる。便所掃除をしてくれる高性能装置付のトイレをモグラは自慢しているようにも見えてくる。そして森の中からたちあがるオオセミタケ(128頁)。菌にとりつかれたセミはそれぞれに悲しんでいるようだ。またそれが森のいきものの繋がりであると、あきらめているようでもある。あとがきに恩師として3名のお名前がある。本郷次雄、濱田稔、吉見昭一の各先生。幸せなきのことの出会いとともに、幸運な師匠との出会いがあったのだろう。それぞれの絵につけられたエッセイも楽しい。

「東北きのこ図鑑」

著者：工藤伸一、監修：長澤栄史、出版社：家の光協会、2009年9月1日発行、A5判、271頁、ISBN：978-4-259-56261-8、2940円(税込)

これまで本郷次雄先生を中心に編集されてきたハラタケ類の図鑑類は、本郷先生が拠点とされていた滋賀大学のまわりのきのこを中心に説明がすすめられたこともあり、完全に西日本にかたよった種の取り上げ方となっていた。そのため保育社の原色新日本菌類図鑑 I (1987)、通称本郷図鑑を長野県や東北・北海道で使用するときには、なかなか難しい面があり、現在でもその状況は続いている。そんな中で、著者は青森を中心にハラタケ類の菌類の調査をすすめ、東北を中心とする、できるだけ身近なきのこ図鑑を編纂したいと願ってこられたにちがいない。本書の帯には「新種および日本新産種25種を含む東北地方のきのこ計477種を紹介」とある。帯の「新種」にはいろいろと事情もあるようだが、これまでの図鑑になかった情報を、できるだけ掲載したいという意欲が伺える。確かに見たことも聞いたこともないような種類が写真とともに多数掲載されている。加えて、一步踏み込んだ解説もある。例えばマツオウジとして掲載されている写真はツバのあるタイプである。ちなみに本郷図鑑では、長澤先生の執筆で「通常つばはなく」という紹介がなされている。マツオウジは現在の図鑑では *Lentinus lepideus* という学名があてはめられているのだが、例えば D. N. Peglerさんの本(1983)の *L. lepideus* にはツバがついている。本書の扱いは、この学名とマツオウジという和名をむすびつけた結果なのだろう。しかし江戸時代の坂本浩然の菌譜に掲載の松旺子(シラマツダケとして紹介してある)にはツバが無い。川村清一先生のマツオウジの図にもツバが無い。保育社をはじめとするこれま



での図鑑類にもツバはない。気持ちとしてはツバの無い方にマツオウジの和名をあてはめてほしかったな、と思ったりもする（このへんの和名と学名のルールははっきりしていない、またツバの有無は種の違いにつながるのかどうか、ちゃんと調べないといけないという人もいる）。その他、いろいろな情報がもりこまれていますので、是非手にとってながめてみてください。ちなみに千葉県のマツオウジは、ツバの無いものが通常見られ、県外から持ち込まれたようなスギの材などに、はっきりとツバの有るものが発生する傾向にあるようです。

「きのこのヒミツを知るために — 第40回特別展 きのこのヒミツ」

著者：佐久間大輔・丸山健一郎，出版：大阪市立自然史博物館，2009年9月19日発行，B5判，65頁，700円（税込）

大阪市立自然史博物館で、2009年9月19日から11月3日まで開催された、特別展「きのこのヒミツ」の展示解説書。通常展示の担当者は、展示室の特別展会場を完成させると同時に、このような図録の原稿も平行して執筆しなければならない。加えて、今回の大阪では、菌類生態学講座などの連続講座も企画されており、ヘトヘトになるくらい大変だったにちがいない。にもかかわらず本書は、単独の読み物としても十分活用できるきのこ案内本となっており、巻末には親切な参考文献ガイドもついている。本書のタイトルでウェブ検索すれば博物館のオンラインミュージアムショップがヒットし、購入できるようになっています（2月末時点）。



「日本のきのこ 262」

著者：柳沢まきよし，出版社：文一総合出版，2009年9月20日発行，A6判，320頁，ISBN：978-4-8299-1171-6，1050円（税込）

262種類と限定された種類数なのだが、著者の故郷である長野県でみられる種類を中心としたポケット図鑑。ホンシメジ、タマゴタケ、ベニテングタケ、ウラベニホテイシメジなどの重要菌は、見開き2頁で紹介されており、それ以外のものも1頁の中に3～4カットの写真で断面図や柄の基部、傘の裏、加熱後の色の変化、など、その種の特徴ができるだけ表現できるように工夫されており、ポケット図鑑にしては非常に親切。紙質もよく選ばれており小型ながら開きやすい。しかし掲載されたそれぞれの写真の同定は大丈夫だろうか、という気がかりな点もある。クサハツとクサハツモドキは、



異なった写真でそれぞれとりあげられているのだが、そもそも、2種を肉眼で区別ができるのだろうか、とか、ヒカゲシビレタケの写真の同定は大丈夫だろうか等と心配してしまう。本書は価格も安く、イントロ部分にも編集の工夫があり、全体としてはよくできている図鑑です。

「北海道ハラタケ類の分類学的研究：特にザラミノシメジ属、ツエタケ属、ビロードツエタケ属、フクロタケ属、ウラベニガサ属」

著者：竹橋誠司・星野保・糟谷大河，企画・発行：NPO法人北方菌類フォーラム，2010年3月発行，A4判，ハードカバー，150頁，ISBN：978-4-9905010-0-6，頒布予定価格：5000円＋郵送費実費

今読んで頂いている会報原稿の締め切り日にメールで案内を頂いた。収録52種、見開き片面フルカラー印刷、全ての種類に線画による顕微鏡図が添付され、属内の分類資料や検索表もついているという。ふむふむ。著者の竹橋さんは、これまでウラベニガサ属をはじめとする新種・日本新産種を多数発表されている超真面目な元銀行員で、奥様や仲間の方々とともに北海道を中心とするハラタケ類の調査を実施され、主宰団体の北方菌類フォーラムから膨大な数のハラタケ類の図版集を配布する活動を続けてこられた方である。ということで非常に期待できる図版集であるにちがいない。本書は、地方からきのこ情報を発信する場合の、お手本となるようなすばらしい研究資料集であると思います。

(本稿は、きのこアドバイザー通信第16号に掲載のものを改稿したものです)

